

在沖フィリピン人女性の多元的アイデンティティ

仲 里 和 花

要 約

筆者は、沖縄県在住フィリピン人女性の抱えるコミュニケーションの問題に関心を持ち、2011年から調査研究を続けている。筆者の出会ってきた在沖フィリピン人女性達は、沖縄社会において、言葉の壁にぶつかりながらも、沖縄人男性と結婚し、出産・育児を経験し、就労しながら沖縄社会に適応していた。彼女達は、日本語、英語、タガログ語、地方語の複数言語を使いこなし、妻、母親、嫁、就労者として様々な顔を持つ。本稿では、調査協力者の在沖フィリピン人女性が、自分の培ってきた複数言語を使う行為を通して、どのように多元的アイデンティティを構築しているのかを考察した。その結果、彼女達は言語能力の不足から「アイデンティティの揺れ」を経験するが、さらなる言語習得によってアイデンティティの立て直しを図っていた。また、彼女達の中には、日本語⇒英語⇒タガログ語⇒地方語の順に言語の階層性があり、子供の言語継承に関して、日本語や英語の継承には熱心だが、タガログ語や地方語の継承は難しいことがわかった。

キーワード：在沖フィリピン人女性、多元的アイデンティティ、複数言語、アイデンティティの揺れと再構築、言語の階層性

1. 研究の背景・目的

近年、グローバル化の時代を迎え、国家間・言語間・文化間を超えた人々の移動が増加している。日本国内でも外国人との接触機会が増えたことにより、日本人と外国人の国際結婚が増加傾向にある。厚生労働省人口動態統計（2016）によると、日本の国際結婚件数は1985年に12,181件であったが、2015年には20,976件となり30年間で約2倍に増えた。フィリピン人妻と日本人夫の結婚件数は、2006年には、国際結婚の組み合わせの中でも最多の12,150件となった。2015年には、3,070件と減少しているが、中国人国籍妻の組み合わせに次いで2番目に多い（厚生労働省人口動態統計2016）。沖縄県では、2016年、フィリピン人の人口は1,890人で在沖外国人総数の約13%を占める。その内、女性は1,256人で約66%を占め、永住者・日本人の配偶者・定住者等の在留資格で滞在しているフィリピン人は1,388人で約73%を占める（法務省入国管理局2016）。

筆者は、1998年の1年間、フィリピン現地のNGOスタッフとして、日本でエンターテイナーとして働いていたフィリピン人女性達の支援に携わっていた。この体験がきっかけとなり、帰沖後、沖縄県在住フィリピン人女性の抱えるコミュニケーションの問題に関心を持ち、2011年から調査研究を続けている。筆者の出会ってきた在沖フィリピン人女性達は、沖縄社会において、言葉の壁にぶつかりながらも、沖縄人男性と結婚し、出産・育児を経験し、就労をし、多様な生き方

を模索しながら、沖縄社会に適応していた。彼女達は、日本語、英語、タガログ語、地方語の複数言語を使いこなし、妻、母親、嫁、就労者として様々な顔を持つ。本稿では、在沖フィリピン人女性達が、複数言語を話す行為によって、多元的アイデンティティを構築していく過程を考察していく。また、多元的アイデンティティを構築していく過程で、「アイデンティティの揺れ」を経験し、それを立て直していく様子や、彼女達の中にある言語の階層性がアイデンティティ構築や子供達への言語継承に与える影響を考察していく。

2. 先行研究

2. 1. 言語とアイデンティティ

言語とアイデンティティの関係については、例えば、中村（2001:iii）が、言語を抽象的な構造ではなく、社会を作り上げる行為と捉える「構築主義」の考え方を導入し、言葉は伝達の道具以上に、社会に密着した「行為」であるとしている。社会の中の知識や個人のアイデンティティは厳然として存在しているのではなく、歴史・社会的に作り上げられており、この過程において言語が大きな働きをしていると述べる。つまり、「ことばを使う行為」によってアイデンティティが作り上げられると言う。

また、言語を基盤に構築されるアイデンティティを「言語アイデンティティ」と称して、河原（2004:199）は、金沢市在住フィリピン人女性の言語アイデンティティについて考察している。彼女達は、日本語、英語、

タガログ語、地方語を話し、これらの言語に基づいて「多元的言語アイデンティティ」を構築しているという。

第二言語を基盤に構築されるアイデンティティについて、窪田（2005:39）は、ESLの学習者を例に挙げて、第二言語の学習者は、学習言語の社会に参加しようとする中で、常に自身のアイデンティティを構築し、作り上げ、それを表現しているという。例えば、米国に留学した学生は、米国社会で生活する中で、米国人というグループの行動上の特徴について、日々の生活における自己と他者との比較を通して、様々なことに気づいてく。日々の生活の中で英語を習得しながら、彼らの考えの中に、学習言語のアイデンティティ、つまり「英語のアイデンティティ」を構築していくという。これは、米国人そのものの中にあるアイデンティティを指すものではなく、英語を学ぶ留学生の英語に対する思いや期待を基盤に構築されるアイデンティティであると捉えている。

さらに、窪田（2005:42;前掲書）は、「言語のレパトリー」、つまり、人々が話すために持っている様々な言語の形やスタイルについて触れている。この言語のレパトリーという概念は、ただ1つの話し方しか持たない人は、この世に存在しないという前提に基づき、すべての人々は、場面ごとに呈示すべき自分自身のアイデンティティを構築するために、必ずいくつかの言語のレパトリーを持っていることを示す。適切にコミュニケーションを図るために、人々は話し相手、状況などに合わせたスタイルをレパトリーの中から選んでいる。

本稿では、言語を話す行為によってアイデンティティが構築されるという概念に基づいて、調査協力者の在沖フィリピン人女性達が、日本語、英語、タガログ語、地方語を基盤に、どのように多元的アイデンティティを構築しているのかを考察していく。

2. 2. アイデンティティの分裂と統合

河原（2004:199;前掲書）は、金沢市在住フィリピン人女性の言語アイデンティティについて考察しているが、彼女達のように複数の言語に馴染んでいると、そこには「アイデンティティの分裂」という現象が生じてくると言う。在日フィリピン人女性は、新たな言語と出会い、それを学んでいく過程において、戸惑い、

混乱が生じて、言語アイデンティティは分裂を経験することになるが、その分裂は、やがては統合へと向かい、多元的な言語アイデンティティとなっていくと述べる。河原（2004:199;前掲書）は、「言語アイデンティティの分裂」と「言語アイデンティティの統合」の違いについて、その人が複数の言語を前にして、戸惑い、混乱を感じたり、自分が何者かわからなくなるのならば、否定的な表現である「分裂」という表現を用い、この状態に対して、納得したり、自信を持つようになるならば、肯定的な表現を用いて、言語アイデンティティは「統合」されたと称することができると述べる。また、高木

（2014）は、経済連携協定に基づいて看護師候補者として来日したフィリピン人ケアワーカーのコミュニケーションの問題を考察している。高木（2014:29-30;前掲書）によれば、彼女達がケアの現場で経験しているコミュニケーション上の問題は、食事の介助が上手にできない、患者の心のケアができないなどのコミュニケーション上の失敗が問題なのではなく、この失敗によって周囲の看護師や患者が彼女達を「無能」であり「信用できない」と意味づけし、彼女達の看護のプロとしての職業上のアイデンティティが脅かされた時、そのコミュニケーションを問題だと感じるという。だから彼女達は自分のアイデンティティを脅かしているのは言語であり、日本語をマスターして言語の壁さえ乗り越えることができれば、本来の自己アイデンティティを回復できると考えている。

以上の先行研究を踏まえて、本稿では、調査協力者の在沖フィリピン人女性達が、複数言語を話しながら多元的アイデンティティを構築していく過程で、戸惑いや混乱を感じて、「アイデンティティの分裂」を経験しているのか、また、「分裂」を乗り越えて、どのように「アイデンティティの統合」を果たしているのかを考察していく。さらに、言語の壁、つまり言語能力の不足によって、彼女達が自分を「無能」と意味づけ、その結果、彼女達の中で「アイデンティティの揺れ」が起こる現象を考察していく。

2. 3. フィリピン人の言語の階層性

河原（2004:187;前掲書）は、在日フィリピン人達は複数の言語を操るが、言語の持つ社会的なステータス、言語のイメージ、経済的な有用性などを勘案すると、各言語の階層的な地位は異なると述べている。そ

して、金沢在住のフィリピン人女性達の中には共通認識として、日本語⇒英語⇒タガログ語⇒地方語という順で言語の階層性があると述べている。

また、柿原 (2009:273) は、英語が重要であるという日本社会における言語観は、日本人が非英語話者である外国人を差別する可能性を秘めており、非英語話者である外国人が自分の母語を低く評価してしまう要因になると述べている。いかなる言語を母語とする者も、言語を理由に差別されるべきではなく、国際結婚夫婦の子供達にも、いずれかの親の母語である日本語以外の言語を学ぶ機会を与えることが必要であると主張している。

本稿では、調査協力者の在沖フィリピン人女性が、複数言語を話す中で、どのような言語の階層性を持っているのか、そして、その言語の階層性は、調査協力者であるフィリピン人女性のアイデンティティ構築にどのような影響を与えているのか、さらに、その言語の階層性が子供達への言語継承にどのような影響を与えているのか、考察していく。

3. 研究方法

3. 1. 調査協力者の属性

調査協力者は、沖縄県出身男性と結婚した県在住フィリピン人女性6名である。これらフィリピン人女性の年齢は40代から50代で平均年齢は48歳であった。最終学歴は、大学卒1名、大学中退1名、短大卒2名、専門学校卒2名であった。職業は、保育所のアシスタント (3名)、ALT (1名)、工場 (1名)、農業 (1名) であった。沖縄県在住期間は10年から22年で平均年数18年であった。出身地は、ルソン島北部リサル州 (1名)、ミンダナオ島ダバオ市 (2名)、パナイ島イロイロ市 (1名)、セブ島セブ市 (1名)、マニラ首都圏ケソン市 (1名) であった。第一言語は、イロカノ語 (1名)、ビサヤ諸語のセブアノ語 (3名) とイロongo語 (1名)、タガログ語 (1名) であった。1組を除いて5組は有子夫婦であり、子供の平均年齢は15歳であった。調査協力者の属性は表1に示した通りである。これら6名の調査協力者は、那覇市内のカトリック教会に属するフィリピン人シスターを通して紹介してもらった。

表1 調査協力者の属性

番号	名前	年齢*	最終学歴	職業	滞在期間*	出身地	第一言語	子供の年齢*
1	A	51	専門学校	保育所のアシスタント	22年	ルソン島北部リサル州	イロカノ語	18歳
2	B	44	大学中退	工場	10年	ミンダナオ島ダバオ市	ビサヤ諸語 セブアノ語	24歳、22歳
3	C	46	大学	ALT	21年	パナイ島イロイロ市	ビサヤ諸語 イロongo語	20歳、19歳、 14歳、4歳
4	D	44	専門学校	保育所のアシスタント	17年	マニラ首都圏ケソン市	タガログ語	13歳、11歳
5	E	53	短大	保育所のアシスタント	22年	ミンダナオ島ダバオ市	ビサヤ諸語 セブアノ語	20歳、19歳
6	F	54	短大	農業	16年	セブ島セブ市	ビサヤ諸語 セブアノ語	0人

*年齢・滞在期間・子供の年齢は、データを収集した2014年12月から2015年1月の期間のものである。

3. 2. 手続き

データは2014年12月から2015年1月にかけて、質問紙およびインタビューにより収集した。調査協力者であるフィリピン人女性にはインタビューの前に研究の目的及び方法、研究協力の自由意思、途中辞退の権利、匿名性の厳守、プライバシーの保護、研究結果の公表等について文書 (英語) および口頭 (日本語) で説明

し、研究協力の承諾の意思を確認し署名を得た。

質問紙 (英語) は調査協力者のプロフィール等面接に必要な基本情報を収集する目的で、インタビューの前に記入してもらった。インタビューは1人につき60分から90分の半構造化インタビューを日本語及び英語で実施し、調査協力者の承諾を得て録音した。インタビューでは、①教会生活・フィリピン・コミュニティー、

②家庭、③職場での場面における言語使用と、その使用言語に対する意識等について質問し、調査協力者の語りを引き出した。

3. 3. 分析方法

本稿では、半構造化インタビューによって得られた質的データを分析するために、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach、以下M-GTAと記す) を用いた (木下2003:2007)。M-GTAは、データに密着した分析によって実践への応用性の高い理論生成を目的とし、本研究のような質的データを分析する際に有効な研究法とされている (木下2003;前掲書)。本稿の在沖フィリピン人女性の多面的アイデンティティが構築されていく過程モデルを生成するために、M-GTAは調査対象者1

人1人の語りのコンテクストを重視して分析を進めるのに適している判断した。

4. 結果

在沖フィリピン人女性を対象に行ったインタビューのデータを、M-GTAで分析した結果、「日本人 (沖縄人) としてのアイデンティティ」「英語のアイデンティティ」「フィリピン人としてのアイデンティティ」という3つのカテゴリーに整理された。データから作成した概念とその定義、また複数の概念のまとまりから生成したカテゴリーの一覧を表2に示した。また、複数の概念間の関係をまとめた概念図、つまり分析の結果を図1に示した。ストーリーラインは以下の通りである。

表2 概念、カテゴリーの一覧

カテゴリー	概念	定義
〈日本人 (沖縄人) としてのアイデンティティ〉	1 日本語習得の必要性	日本語を習得することは当然であり不公平を感じない。
	2 日本語の学習	日々、日本語の辞書を片手に、日本語習得に努める。
	3 日本人 (沖縄人) としてのアイデンティティの確立	沖縄の地に馴染み、日本語をしゃべることが自分らしいと感じる。自分は半分、日本人 (沖縄人) である。
	4 アイデンティティの揺れ	夫や子供に自分の日本語を理解してもらえない時、自分は日本人になれないというアイデンティティの揺れを経験する。
	5 アイデンティティの再構築	日本語に対する劣等感をさらなる日本語学習で乗り越えて、アイデンティティを再構築していく。
〈英語のアイデンティティ〉	6 自分に合った職探し	様々な仕事を経て、今の仕事にたどり着く。
	7 英語能力を活かした仕事	保育園や小学校で、子供たちに英語を教える仕事に就き、自分の能力を活かしていることに満足している。
	8 子供への英語継承	子供たちに自分の母語であるタガログ語や地方語を教えるよりも、英語教育に熱心である。
〈フィリピン人のアイデンティティ〉	9 多言語を駆使する	フィリピン・コミュニティーでマニラ出身者とはタガログ語を話し、地方出身者とは地方語を話す。
	10 タガログ語に対する劣等感	地方語 (イロンゴ語) が母語であるため、タガログ語を話すことに劣等感を感じる。
	11 地方語を話す喜び	同じ出身地域の人に出会うと地方語を話すことができるのでうれしい。

4. 1. 日本人 (沖縄人) としてのアイデンティティ

沖比国際結婚夫婦間で使用される言語は、主に、日本語である。これは、他府県在住の日比国際結婚夫婦間での日本語だけが使われるという言語的特徴と一致している (河原2004:180;前掲書)。フィリピン人女性

は、英語、タガログ語、地方語の複数言語を話すことができるが、日本人夫に合わせて、自分だけが日本語を話す努力をしなければならないことに対して不公平を感じることはあるのか、尋ねたところ、すべての女性が「自分が日本に来たから仕方がない」「日本語を

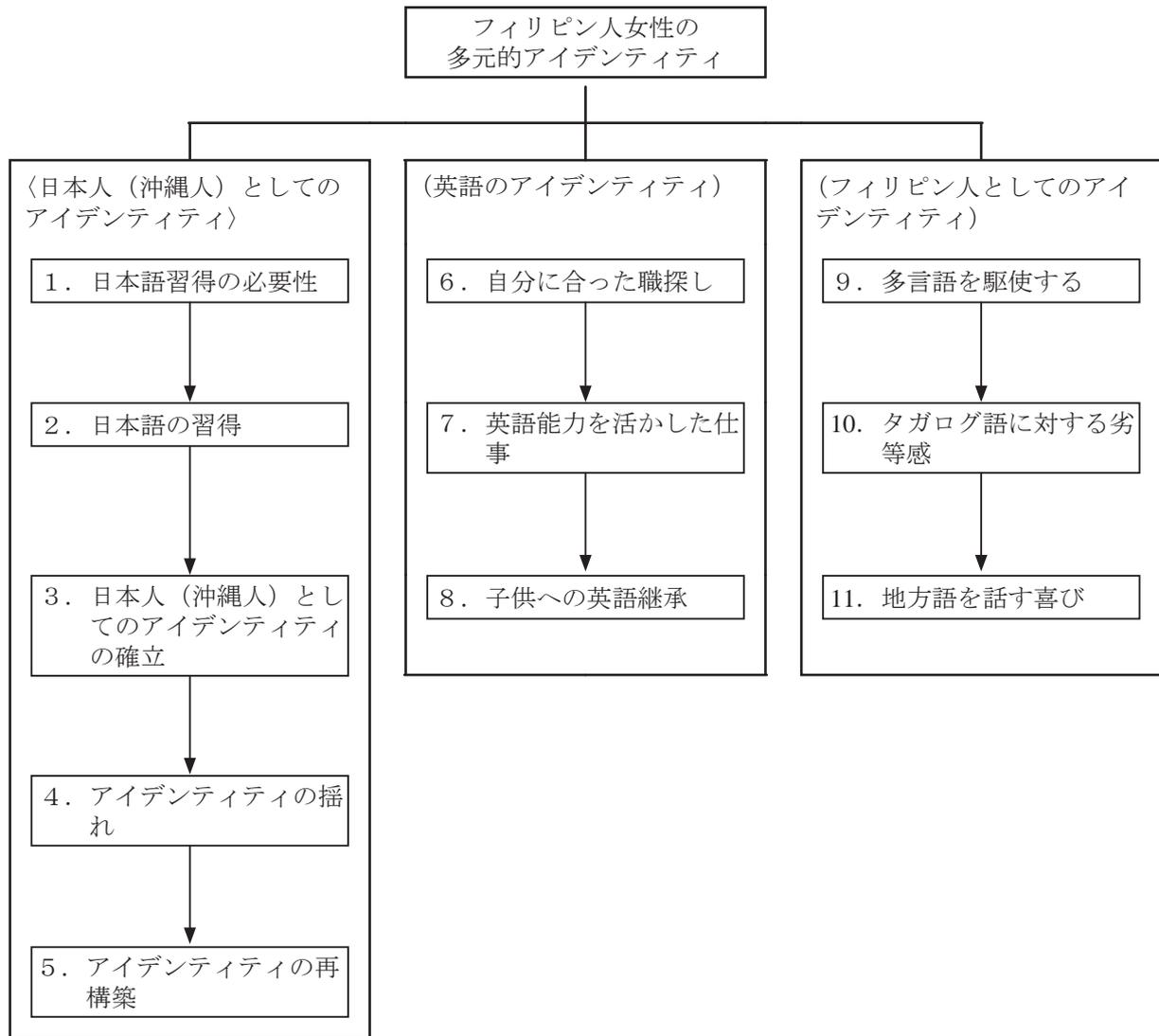


図1 フィリピン人女性の多面的アイデンティティ

話せることは、私にとってプラスになる」など、日本語習得は当然であると肯定的に捉えていた。「1. 日本語習得の必要性」を認識し、日本語が早く上達するように日々努力している様子が見られた。

来沖当初から、彼女達は、日々、日本語の辞書を片手に、「2. 日本語の学習」に力を入れていた。「単語、単語も、辞典、見ながら話して。」「もう、どこ行っても（日本語の）本を持っていたので・・・病院行っても銀行行っても、どこでも、ずっと待つ時間あったら、本開いて、勉強して。」「もう、わからなかったら、すぐ辞典引いて、何言ってるって、わからない言葉、すぐメモして、調べたりして。」などの言葉にみられるように、来沖当初は、日本語を習得するために、かなりの努力をしている様子が窺えた。

本稿の調査協力者6名のフィリピン人女性の沖縄在住年数は、平均18年である。彼女達の日本語能力は高

く、日常会話はもちろんのこと、自分の考えや気持ちを難なく表現することができる。この言語能力の高さは、彼女達の沖縄滞在中の日本語学習の努力のたまものであると言える。長期間の在住を経て、彼女達は沖縄の地に馴染み、日本語を習得していく。日本語を話している時が、一番、自分らしくいられる時であると語っている。「沖縄が自分のあれ（故郷）みたいですね。」「気持ちは、もう沖縄の人・・・あっち（フィリピン）に行ったら、また落ち着かないんだ・・・自分の故郷帰ったら、もう落ち着かない。沖縄に帰ってからの落ち着く。」「自分らしくいられる言葉、やっぱり日本語かな、日本語みたい。生まれ変わるとしたら日本人になりたいと思ってる。」彼女達の多くが、自分は半分、日本人（沖縄人）であると認識していた。さらに、彼女達は、沖縄語も習得していた。「一応、方言もね、どこの人（県内のどこの地域の人）かって言われるん

ですよ、いつも。方言もよくしゃべるし。」沖縄に長年滞在して、日本語や沖縄語を話す環境の中で、日本語を習得していき、半分、「3. 日本人（沖縄人）としてのアイデンティティを確立」している様子が窺えた。

しかし、彼女達にとって、日本語は第二言語である。もちろん、日本語を母語とする夫や子供とのコミュニケーションにおいて、日本語を彼らほど完璧に話すことができないという言語上の問題を抱えている。

Cさんは、夫との会話の中で、Cさんの話す日本語は理解できないと夫から指摘を受け、「私は、日本語で、日本人にはなれない」という「4. アイデンティティの揺れ」を経験していた。また、Cさんは、自分よりも早く日本語を習得していく子供との会話の中で、「キャッチボールができない。すぐ考えられない。やっぱり日本語完璧じゃない。意味がわかるんですけど、理解して、それを、返す時間がほしい。ゆっくりですね・・・子供が親の言うこと聞かないことが多い。」と述べ、日本語能力の不足によって、子供との会話のキャッチボールができず、子供が言うことを聞いてくれないという状況の中で、母親としてのアイデンティティの揺れを経験していた。本調査の調査協力者の多くは、日本語がうまく話せないことで、劣等感を抱くことがあると述べ、そのような時、彼女達は日本人（沖縄人）としてのアイデンティティの揺れを経験していることが窺えた。

それでは、その日本語能力の不足から生じる劣等感を彼女達はどのように乗り越えているのだろうか。「やっぱり、自分よりも、(夫は) 上手じゃないですか。こっちの、日本人じゃないから、うちは。それもありますね。悔しいって。悔しいと思って、また勉強して。」「言葉がわからないと、すごく、inferiorになるんですね。私はもう、子供が言いたいのに、わからないっていうのが、もっと勉強しないといけないかなって、inferiorになるんですね。だから・・・自分は、うん、勉強しなきゃって。」彼女達は、日本語能力の不足に直面して、劣等感を感じたり、悔しい思いをしながら、さらなる日本語学習に励んでいた。日本語学習に力を入れることによって、日本語能力の不足に対する劣等感を乗り越えて、日本人（沖縄人）としてのアイデンティティを立て直し、「5. アイデンティティの再構築」を図っていた。

以上のように、フィリピン人女性達は、沖縄に長期

滞在する中で、日本語や沖縄語を習得し、半分、日本人（沖縄人）としてのアイデンティティを構築している。しかし、日本語能力の不足からくる劣等感から、自分は完璧な日本人（沖縄人）にはなれないという、アイデンティティの揺れを経験していた。そして、その劣等感を克服するために、さらなる日本語学習に力を入れ、その劣等感を乗り越えて、再び、日本人（沖縄人）としてのアイデンティティを再構築していた。

言語とアイデンティティには密接な関係があるが、彼女達は、日本語（沖縄語）を話すことによって、日本人（沖縄人）としてのアイデンティティを構築していく。しかし、言語能力が不十分である場合、その言語によって確立されていたアイデンティティの揺れが生じることが推察できる。その揺れるアイデンティティを立て直すために、さらなる言語能力を発達させることによって、再び新しいアイデンティティを構築させていくと推察できる。

4. 2. 英語のアイデンティティ

本稿の調査協力者6名のうち、4名の女性が英語を活かした仕事に就いていた。3名の女性がインターナショナル保育園に、1名の女性が小学校のALTとして勤務していた。彼女達は、この仕事にたどりつくまでに、様々な仕事を経験していた。自分の能力を活かしていない、または、自分に適していないと感じ、転職を繰り返していた。「食堂で、今度、お蕎麦屋さん、働いて、お蕎麦屋さん辞めて、パン屋さん、〇〇工場、そして掃除のあれ3年。」Aさんは、飲食店や工場、清掃の仕事などを経て、現在のインターナショナル保育園に職を得て、8年間、働き続けている。

「生徒は、日本人とアメリカ人で、みんな先生は、フィリピンから来たんですよ。フィリピンの先生。私はアシスタント。（子供達に）英語教える。0歳から6歳まで。」「日本人の子供達は、最初、英語わからないです。日本語、また英語にするんです。先生はフィリピンから。日本語わからないですね。」3名の女性達が働くインターナショナル保育園では、日本人とアメリカ人の子供達に英語を教えている。しかし、フィリピンから来て間もない保育士も多く、彼らは日本語を話せない。日本人の子供達が英語を理解できない時には、彼女達がフィリピン人保育士と日本人の子供の間に入って通訳をすることもある。

「いろいろ仕事した。今、一番楽しい、子供達と遊んだり勉強したり。・・・(やっぱり英語が通じるのがいいですね。) そう、はい、英語。」彼女達は、様々な職を転々として、「6. 自分に合った職探し」をしてきたが、ようやく、自分たちの英語能力を活かした保育園での職を得て、今、とても充実した生活を送っていた。

また、Cさんは、小学校のALTの仕事をしていた。「やっぱり英語なので、全然違う言葉なので、職場の人は抵抗があるのかな、やっぱし。日本語もわからないのに何で英語勉強しないといけないのっていう気持ちがあると子供には伝わるんですよ。」「やっぱり、英語というのは楽しく、勉強して、好きにさせたい。・・・~~子供勉強のために好きにならなくちゃいけませんよ。~~」「英語というのは、わからなくてもいいんですよ。英語はわからない。先生がわからなくてもいい。一緒に勉強しましょうっていうの、いつも、その気持ちで教える。」Cさんは、一緒に働く日本人教師が英語を教えることに抵抗感を感じており、その気持ちが子供達に伝わって、子供達が楽しく英語を勉強できる雰囲気がないことを問題であると指摘している。やはり、英語を教える先生が英語を好きにならないといけない。英語がわからなくても、ALTの先生と一緒に学びながら、子供達と一緒に成長していくという姿勢が大切であると述べている。これは、Cさんがフィリピンで培ってきた教育観であると推察できる。上から教えるのではなく、子供達の視点に立って子供達と共に学んでいく姿勢の重要性を指摘している。このように、自分が経験してきた英語教育を通して、沖縄の小学校の英語教育のあり方を改善していくために、日本人教師の姿勢に何が必要であるかを提言している。ここに、英語という言語能力を培ってきた経験を活かして、Cさんが英語教育者として、英語のアイデンティティを表現している様子が窺えた。

以上のように、フィリピン人女性達は、自分達がフィリピンで培ってきた「7. 英語能力を活かした仕事」に就くことによって、英語を話すという行為の中で、<英語のアイデンティティ>を認識していることが推察できる。

フィリピン人女性達は、このような職場体験を通して、沖縄社会における英語の社会的・経済的有用性を認識している。そして、自分の子供達にも英語を継承

することによって(「8. 子供への英語継承」)、子供達が将来、英語を活用して、良い仕事、良い地位に就けることを願っている。「イングリッシュと、ミックスして、子供達は小さい時は、インターナショナルスクールに通わせて。」「英語、英語が勉強させてほしい。

(タガログ語は?) 教えたいけど、先に、将来は、英語の方がいい。」「今、英語しか教えてないですね。もう、ちょっとだけね。(タガログ語は?) うん、そんなはないな。」「フィリピン人女性の母語は、タガログ語や地方語だが、彼女達は、自分たちの母語を教えるよりも、英語の教育に熱心であった。その理由は、前述したように、タガログ語や地方語よりも、英語の方が社会的・経済的有用性が高いと認識しているからであろう。

本稿の調査協力者のフィリピン人女性達は、様々な職場を転々としてきたが、最終的には、自分達が培ってきた英語の能力を活かした仕事にたどりつき、そこで、英語を活かして満足のいく働き方をしてきた。職場では、英語という言葉を使って業務を遂行することを通して、自分の中に英語のアイデンティティを認識していることがわかる。また、子供達にも、自分の母語ではなく、英語を継承することを通して、子供達の将来に夢を託している。

ダブルの子供達は、父親と母親の両方の言語を習得してバランスのとれたアイデンティティを構築していくことが理想とされているが、現在の状況では、フィリピン人である母親側の言語(タガログ語)を子供達が継承していくのは難しいことがわかる。

4. 3. フィリピン人としてのアイデンティティ

フィリピンはカトリック教国で、人口の83%はカトリック信者である。在沖フィリピン人の多くもカトリック信者であり、沖縄県内のカトリック教会のミサに参加すると、必ずそこにはフィリピン人の顔ぶれが見られる。本稿の調査協力者6名も全員カトリック信者である。彼女達が所属しているY教会には、20人ほどのフィリピン人が通っており、月1回、タガログ語ミサや茶話会が開かれていた。フィリピン人女性達は定期的に集まり親睦を深めていた。また、彼女達は、県内の他のカトリック教会のフィリピン人信者と密に交流しており、大きな集会になると何百人規模のフィリピン人が集まる。彼らは、カトリック教会を基盤に

フィリピン・コミュニティーを形成していると言える。このようなフィリピン・コミュニティーでは、タガログ語、地方語、英語、日本語、様々な言語が入り混じっていた。「マニラの人、自分たちの言葉しかしゃべれないんです、タガログ語・・・自分たちがヴィサヤ・・・（マニラの人はヴィサヤ語）しゃべれないんです。ミンダナオの所は、両方しゃべれるんですよ。タガログ語もしゃべれるし、自分達の方言も・・・この人マニラの人だったら、じゃあ、タガログ語しゃべろう、しゃべるねって。」このように、マニラ出身者とは、タガログ語で話し、ヴィサヤなどの地方出身者とはヴィサヤ語などの地方語を話している。（「9. 多言語を駆使する」）

このように、フィリピン・コミュニティーでは、フィリピン人同士が交流を深め、エスニック集団としての連帯を確かめ合っている。タガログ語や地方語を話すことによって、彼女達は、自身の中に、フィリピン人としてのエスニック・アイデンティティを認識していると言える。タガログ語を話している時は、フィリピン人としてのアイデンティティを認識し、地方語で話す時は、フィリピン人地方出身者としてのアイデンティティを認識していると推察できる。

日本では、地方出身者は、東京都出身者と話す時、標準語がうまく話せないという理由で、言葉に対する劣等感を抱くことがあるが、本稿のインタビュー調査を通して、フィリピン人の間でも同じ現象が見られることがわかった。「タガログ語、あんまりできなくて難しい。すごく inferiority complex って言うのかな、タガログ語しゃべるのも。すごく、フィリピン人なのにタガログ語がしゃべれないというのが、みんな、変に思う、思われるのが、すごく恥ずかしい。自分は恥ずかしいなあと思って、しゃべれなくて・・・もう、タガログ語でバーッとしゃべられると、自分もしゃべりたいんだけど、なかなか出てこなくて、英語で出たり、日本語で出たりするのを、なんか、逆に、変な感じ。」Cさんは、地方出身者で母語がイロongo語であるため、タガログ語をあまり話せない。マニラ出身者の人とタガログ語で話す時、タガログ語がうまく話せない理由から、劣等感を持つと述べている。（「10. タガログ語に対する劣等感」）タガログ語がうまく出てこない時は、英語や日本語に切り替えるが、フィリピン人なのにタガログ語が話せないということで、か

えって、変に思われていると感じている。

しかし、地方出身者は、地方出身者なりの特典もあると考えている。「すごい、嬉しい、この同じ島の人、すごい嬉しいですよ。もうイロongo語がしゃべれる。あーしゃべれるしゃべれる。楽しく感じる。なんか、懐かしいっていうの、そんな感じかな。」「日本にいと、Japanese, English, Tagalogがしゃべれる人が多いんですね。で、Local languageは、あんまり、いないんですよ。だから、例えば、自分は姉がいるので、姉と一緒にいる時、Local languageでしゃべると誰にも、なんか、privateな話ができるっていうのは、good point, advantageではあるんですよ。」同じ島の出身者に会って、母語で話せるということは、彼女達にとって、大変嬉しいことであり、子供時代に戻ったような懐かしい気持ちを体験することができる。（「11. 地方語を話す喜び」）また、周囲にその地方語を話せる人がいないので、その地方出身者同士が、秘密の話やプライベートな話をする長所があると言う。

以上のように、フィリピン人女性達は、フィリピン・コミュニティーでタガログ語や地方語を話すことによって、同国人同士の連帯を深め、さらに、フィリピン人またはフィリピン人地方出身者としてのアイデンティティを確認している様子が窺えた。

5. 考察

5. 1. 多面的アイデンティティの構築

「構築主義」では、「ことばを使う行為」によってアイデンティティが作り上げられる（中村2001;前掲書）という考え方があるが、本調査の在沖フィリピン人女性に関しては、第二言語である日本語（沖縄語）を話す行為によって、〈日本人（沖縄人）としてのアイデンティティ〉を構築し、英語を話す行為によって、〈英語のアイデンティティ〉を構築し、さらに、タガログ語や地方語を使う行為によって、〈フィリピン人としてのアイデンティティ〉を構築していることがわかった。

本稿の在沖フィリピン人女性達は沖縄社会で生活する中で、日本人または沖縄人というグループの行動上の特徴について、日々の生活における自己と他者との比較を通して、様々なことに気づいていく。この過程は、自分自身のアイデンティティを再認識する機会となると共に、自分とは異なる日本人または沖縄人のア

アイデンティティについても何らかの思いや期待を構築する機会にもなる。日々の生活の中で、フィリピン人女性は日本語を習得しながら、彼女達の考えの中に、学習言語のアイデンティティ、つまり〈日本人（沖縄人）としてのアイデンティティ〉を構築していく。これは、日本人や沖縄人そのものの中にあるアイデンティティを指すものではなく、日本語を学ぶフィリピン人女性の日本語に対する思いや期待を基盤に構築されるアイデンティティである（窪田2005:39;前掲書）。

また、「言語のレパートリー」という概念（窪田2005:42;前掲書）は、ただ1つの話し方しか持たない人は、この世に存在しないという前提に基づき、すべての人々は、場面ごとに呈示すべき自分自身のアイデンティティを構築するために、必ずいくつかの言語のレパートリーを持っていることを示している。本稿の調査協力者に関しては、日本語、英語、タガログ語、地方語という言語のレパートリーを持っており、その場で適切にコミュニケーションを図るために、話し相手、状況などに合わせて、レパートリーの中から言語を選択し、妻、母親、嫁、就労者などの社会的役割を果たす中で、〈日本人（沖縄人）としてのアイデンティティ〉、〈英語のアイデンティティ〉〈フィリピン人としてのアイデンティティ〉を呈示していることが調査を通じてわかった。

5. 2. アイデンティティの揺れと再構築

河原（2004:199;前掲書）は、在日フィリピン人女性達はマルチリンガルであるが、彼女達のように複数の言語に馴染んでいると、そこには「アイデンティティの分裂」という現象が生じてくると言う。複数の言語を前にして、戸惑い、混乱を感じたり、自分が何者かわからなくなるのならば、否定的な表現である「分裂」という表現を用い、この状態に対して、納得したり、自信を持つようになるならば、肯定的な表現を用いて、言語アイデンティティは「統合」されたと称することができると述べる。

このことから、「分裂」とは、新しい言語に出会う中で、戸惑いや混乱を感じることで、つまり、Aという言語に、Bという新しい言語が加わることによって、本来あったAの「言語アイデンティティ」が分裂する状態であると考えることができる。しかし、本稿の在沖フィリピン人女性の事例では、「分裂」という現象

が見られず、Aという言語（日本語）を使うときに、その言語能力の不足や言語に対する劣等感から生じるAという日本語のアイデンティティの中での揺れを経験している現象を捉らえることができた。よって、本稿では、「分裂」ではなく「揺れ」という表現を用いた。また、彼女達が「アイデンティティの揺れ」を立て直していく過程を、「統合」ではなく「再構築」という言葉で現わした。その理由は、「統合」は「分裂」したアイデンティティが纏まっていくという意味合いがあるが、「再構築」は「揺れ」を立て直すという意味合いがあると考えたからである。

高木（2014:29-30;前掲書）は、在日フィリピン人ケアワーカーがコミュニケーション上の失敗をしたとき、この失敗によって周囲の看護師や患者が彼女達を「無能」であり「信用できない」と意味づけし、彼女達の看護のプロとしての職業上のアイデンティティが脅かされる現象を考察している。本稿の調査協力者であるフィリピン人女性の事例でも同じような現象が見られた。彼女達は、夫や子供と日本語を話す場面で、自分の日本語能力が十分ではないと感じ、そのことに劣等感を抱いた時、「自分は日本人になれない」という「アイデンティティの揺れ」を経験していた。それは、おそらく、彼女達が、日本語を十分に話せないことで、「周囲から日本人として一人前に見てもらえない」という意味づけ（それが思い込みだったとしても）をし、日本人としての自己アイデンティティが脅かされる状態に置かれるからであろう。そのため、彼女達は、さらなる日本語学習に力を入れ、日本語能力を向上させることによって、日本人としてのアイデンティティの「揺れ」を立て直し、再構築していくのである。

ここで、沖縄の人々が本土化されるように、彼女達も完璧な日本語を習得し日本人に同化するように無意識の内に強制されていないかという疑問も残る。しかし、少なくとも彼女達の中には、強制されて日本語を学んでいるという認識がなく、〈日本人（沖縄人）としてのアイデンティティ〉、〈英語のアイデンティティ〉、〈フィリピン人としてのアイデンティティ〉をバランスよく構築し、その状況に応じて臨機応変に言語を使い分け、多元的アイデンティティを提示している様子が窺えた。

5. 3. フィリピン人の言語の階層性

本稿のインタビューの中で、最も自分が大切にしている言語は何か、順番に挙げてもらったところ、調査協力者全員が、1位は日本語、2位は英語、3位はタガログ語、4位は地方語と答えた。これは、河原（2004; 前掲書）が指摘した在日フィリピン人女性の持つ言語の階層性と一致した。

その要因としては、日本語は居住地の主流言語であることから、日本語の社会的ステータスがが高く、沖縄社会で経済活動に参加するためには日本語能力が最低限要求されるため、経済的・社会的実用性が高いと考えていることが挙げられる。また、本調査の在沖フィリピン人女性は、英語には、国際共通語としての社会的ステータスがあると考え、また職場で実際に英語を使っていることから、日本語の次に大切な言語として捉えていることがわかった。タガログ語や地方語は、彼女達の母語であるが、日本語や英語と比較すると、社会的ステータスが低く、経済的実用性も低いと捉えている。さらに、タガログ語話者と地方語話者の間でも、地方語話者がタガログ語話者に対して劣等感を抱くなど、タガログ語と地方語の間にも階層性があることがわかった。

このような階層性は、彼女達が子供達に継承する言語の中にも現われていた。子供達とは、主に日本語で話し、時々、英語を教えるが、彼女達の母語であるタガログ語や地方語は、ほとんど継承されていなかった。英語が重要であるという日本社会における言語観は、非英語話者である外国人が差別される可能性を秘めており、非英語話者である外国人が自分の母語を低く評価してしまう要因になる。

子供達が自分の親の言語を話すことに負い目を感じないように、国際結婚家庭において、父親と母親から継承されるアイデンティティをバランスよく確立するため、子供達には両親の両方の言語を継承することが理想とされるが、在沖フィリピン人女性が置かれている状況では、母親側の母語継承が困難であることが窺えた。

6. まとめ

本稿では、調査協力者の在沖フィリピン人女性達が、日本語、英語、タガログ語、地方語を話す行為によって、〈日本人（沖縄人）としてのアイデンティティ〉、〈英

語のアイデンティティ〉、〈フィリピン人としてのアイデンティティ〉を、それぞれの状況において表現し、構築していく過程を見てきた。彼女達は、日本語能力の不足により、「自分は日本人になれない」という劣等感から、「アイデンティティの揺れ」を経験するが、さらなる日本語学習によって、その劣等感を克服し、〈日本人としてのアイデンティティ〉を再構築していた。

『社会的構築主義への招待』の著書の中で、バー（1997）は、ハレを参考にして、発達とは、その文化の言語的及び説明的規則を使って説明をつくり上げる人の能力が、ますます洗練されたものになってゆく過程であると述べている。本稿の在沖フィリピン人女性達は、日本語、英語、タガログ語、地方語の説明的規則を用いて、それぞれの状況の中で、「私」「I」「ako」という異なる自己を表現していく。それぞれの言語的及び説明的規則を使って自己を説明する能力が洗練されたものになっていく過程で、彼女達のアイデンティティも洗練されたものへと発達していくと考える。言語能力の発達は、日々の人々との相互作用の中で達成されていく。彼女達は、沖縄社会の人々との日々の相互作用に積極的、意欲的に関わることによって、言語能力を訓練し熟達させ、より複雑で洗練されたアイデンティティを発達させていくことができると考える。

また、本稿では、在沖フィリピン人女性達が言語の階層性を持っており、自分の母語であるタガログ語や地方語に対して低い評価をしていることがわかった。ダブルの子供達は、両親の母語を継承し、2つのアイデンティティをバランスよく構築していくことが理想とされているが、現在の沖縄社会の中では、在沖フィリピン人女性が自分の母語を子供達に継承していくことが難しい状況にある。将来、沖縄社会が多文化共生を目指していくためには、非英語話者である外国人を親に持つ子供達が、その親の母語にたいして良いイメージを持ち、学習していく機会を作っていくことが肝要であると考えられる。

本調査の限界としては、調査協力者が6名と少なかったこと、インタビューが調査協力者1人につき1回と限られていたため、彼女達が複数言語を基盤に多元的アイデンティティを構築していく過程や、「アイデンティティの揺れ」を立て直し、再びアイデンティティを構築していくプロセスの細かい描写を表すことのできる十分なデータが得られなかったことである。

今後は、さらに、インタビュー調査を実施して、在沖フィリピン人女性達が複数言語を基盤に多元的アイデンティティを構築していく過程を、さらに細かく深く、分析し考察を加えていきたい。

引用文献

- ヴィヴィアン・バー (1997) 『社会的構築主義への招待』 田中一彦訳、川島書店.
- 柿原武史 (2009) 「第8章 南米出身者と日本人の国際結婚夫婦とその家族の言語使用状況」 河原俊昭・岡戸浩子編著 『国際結婚—多言語化する家族とアイデンティティ』 明石書店 245-275.
- 河原俊昭 (2004) 「7章 在住フィリピン人女性の新しい言語アイデンティティ」 小野原信義・大原始子編著 『ことばとアイデンティティ』 三元社 177-200.
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂.
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂.
- 窪田光男 (2005) 「第3章 演じられたアイデンティティの理論的背景」 『第二言語習得とアイデンティティ』 ひつじ書房 33-46.
- 厚生労働省 (2016) 「厚生統計要覧 第1編人口・世帯 第2章人口動態 婚姻件数、年次×夫妻の国籍別」 閲覧日2017年7月7日.
- 高木香織 (2014) 「異文化間ケアの現場におけるコミュニケーション：EPA看護師候補者の事例から」 『言語と文明』 第12巻 21-33.
- 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』 勁草書房.
- 法務省 (2016) 入国管理局統計 在留外国人統計表「都道府県別 在留資格別 在留外国人 (その4 フィリピン)」 閲覧日2017年7月7日.

Plural Identities of Filipino Women Living in Okinawa

Kazuka Nakazato

Abstract

Abstract. The author has been conducting research since 2011 into the issue of intercultural communication among Filipino women living in Okinawa. The Filipino women the author met are married to Okinawan men, have had experience of giving birth and rearing children, and have jobs in Okinawa. They have tried to find a way to adjust to Okinawan society while struggling with the language barrier. The aim of this article is to show how these Filipino women have constructed their self-identities in Okinawan society.

The author conducted semi-structured interviews with six Filipino women living in Okinawa. The data were analyzed by using the modified grounded theory approach. Results indicated that the interviewees were using at least

three languages in their daily lives, such as Japanese, English, and Tagalog (or local Filipino languages.) Which language they used depended on the situation and as a result they have constructed three self-identities.

When they faced difficulty in speaking Japanese, they tended to experience agitation of their (Japanese) identities. However, they overcame the difficulty by studying Japanese further to try to reconstruct their identities. The development of their language abilities makes their identities more evolved. Their plural self-identities have been integrated in the face of agitation, dissolution and ultimately the renewal of their identities.

Keywords: Filipino Women Living in Okinawa, plural identities, plural languages, agitation and reconstruction of identity, language hierarchy